

今 道子の世界

饒舌な生命感

今 道子

聞き手：佐多保彦 株式会社東機貿 取締役社長

佐多：日本の女性写真家で、いま世界的に注目されているのが今道子さんですね。

このヴィタリテの表紙に、前号より今さんの写真にご登場願っています。表紙写真がかわって驚いておられるであろう読者の方々に、今さんの写真の世界を少しでも伝えることができれば、と思います。

今さんは以前は版画の勉強をされていたそうですね。

今：はい。子供の時から美術に興味をもっていたので油絵を勉強したのですが、何か体質的にあわなくて……。それで版画を始めて、その後写真に出会ったのです。自分に合ったメディアを見つけるのにかなり時間がかかって、やっと到達したという感じです。本格的に始めたのが30歳になってからですから、遅いですね。

佐多：写真はある一瞬をパチッと捕えるわけですが、それがとても不思議な感じがします。生きている一瞬を過去形にしてしまう。

今：本当にそうですね。私はその不思議さに魅力を感じたのだと思います。モノそのものを、印画紙の上に半永久的に時間を越えて存在させる力みたいなものがありますね。

佐多：今さんの世界というのは……。最初は僕もびびりました。

今：すみません (笑)。

佐多：なまなましいイメージが強い。

今：気持ちが悪いと言われたこともあります。

生命をもったものは生々しいし、恐いし、気持ち悪いという部分を含みながら、美しいのではないかと思います。花でも、虫でも、魚でも、人体でも、よく見ると、神様の創ったものはすごいし、恐いし、美しい。

生命はいずれは死んでしまいますので、いま、そこにある美しいものを撮ってしまわなければ、という情熱ですね。

佐多：例えば、魚を使って帽子を作るというような発想はどうして出てくるのでしょうか。

今：やはり、銀色に光る魚の肌の美しさ、形の不思議さに惹かれるものもありますが、触覚的などころで何か人間の生理的な部分に入り込んで行けるようで、見る人たちは食べ物を見ながら、いつもと違った反応を示すところがおもしろい。帽子にしたのは、美術をやっていたせいか、人と同じことはしたくない、自分にしかできないことをしたい、ということが基本的にあります。



今 道子 / こん・みちこ

1955年、神奈川県生まれ。創形美術学校版画科卒業後、東京写真専門学校で写真を学ぶ。84年、神奈川県美術展美術奨学会奨励賞受賞、87年、東川国際写真フェスティバル新人賞、91年、木村伊兵衛賞(*)受賞。国内外で高い評価を得、昨年12月から今年3月までニューヨークのロバート・マン・ギャラリーにて個展を開催。

佐多：素材は新鮮なものばかりですね。

今：魚はほとんど築地の市場へ行き、食べ物として売っているものを買ってきて撮っています。鳥の足は鶏肉専門店の裏に回って行って、あの一、すみません……。と。(笑)

佐多：オブジェ(**)としても素晴らしいですね。

今：でも、撮っているうちに鮮度が落ちてきます。どんどんくたびれていくものをずっと置いておくというのは好きじゃない。写真は光を捕える装置ですから、オブジェが一番美しく見える自然の光のところへそれを置いて、急いで撮影します。ですから、朝は早く起きて夕方までに仕事を終えます。

佐多：今さんの仕事はまさにパーフェクト。一か所でも剥がれたりしたらアウトでしょうから。

今：そうなんです。もう、壊れないで下さい、と祈りながら写します。

佐多：初めに、表現したいイメージというものがあるのですか。

今：やはりモノから入っていきますね。このタコいいな。と思うと、



このタコ、どうにかしたいな、と。そこから何かを自分でイメージして、ちょうど思いついたときにノートに言葉を書いたり、絵を描いたりして、タコへの自分なりのイメージを探していきます。それは子供の頃どこかにあったイメージを掘り起こしているという感じだ、と最近は思います。

そうしてある程度煮詰まった段階で、撮ります。体力をつけておいて、やるぞ！という感じで、何かに取りつかれたように集中して撮ります。全体的には、考えている時間のほうが長いと思います。

佐多：結局、ご自分を表現しているということでしょうか。



水仙+イクラ+帽子, 1986



鮭+チューリップ, 1992

今：そうですね。自分が分かっていないから始めたことだと思います。自分が何ものなのか、どうなって行くのかを知りたい、と。

佐多：今さんの写真を見ていると、いろいろなイメージが湧いてきます。色をつけてみたいとか、生の魚の臭いがするとか、鳥の音が聞こえてくる。非常に静かなようであり、逆に、にぎやかな世界ですね。それは生命力そのものかも知れません。

今：五官を刺激される、というようなことは言われます。無意識の世界に触れられるとも。

佐多：死んだものが、今さんの手によって新しい生命力を与えられる。とにかく不思議に饒舌な世界です。

*

木村伊兵衛賞：日本のスナップ写真の草分けとして讃えられる写真家・木村伊兵衛の業績を記念するために、朝日新聞社が1975年に設置。毎年、写真の制作、発表活動において優れた業績をあげた新人に贈られている。

**

オブジェ：前衛芸術で、怪奇・幻想・象徴的効果をねらって芸術とは無縁と見られる物体（石、流木、車輪など）を取り入れた作品。

熱傷治療の展望

早期切除と人工皮膚

相川 直樹

早期切除法で重症熱傷の治療が進化した

体表面積の30%以上のヤケド（熱傷）は、40年前には致命的、20年前には二人に一人の確率で死亡するとさえ言われていた。しかし、最近の熱傷治療の画期的な進歩で、真皮の中間まで損傷するII度熱傷を全身に受けても、早期治療を施せば死亡することは稀になった。

ちなみに、熱傷は皮膚の損傷の深さによって、I～III度に分けられている。I度熱傷は、日焼けのようなもので放置しても自然に回復する。II度熱傷は、表皮のさらに深部の真皮の中間まで損傷を受けている場合で、III度熱傷は、真皮全層以上（皮下組織や筋肉まで損傷される場合もある）の皮膚の熱による損傷である。

そこで、熱傷治療の権威である、相川直樹慶應義塾大学医学部救急部教授に、II度以上の重症熱傷治療が現在どこまで進んでいるかお話をうかがった。

「現在熱傷の患者さんの場合、LD₅₀といって救命5分5分の限界点は、体表面積80%のII度熱傷あるいは体表面積40%のIII度熱傷といわれています。II度とIII度とでは、損傷の深さの違いだけでなく根本的に治り方も違います。II度の場合は、軟膏やピッグスキン（ブタの皮の製剤）などをうまく使って、約2週間かなり嚴重な治療をして皮膚の乾燥や感染を防ぐことができれば、自然に皮膚が再生でき、治るわけです。

ただ、III度の場合は、皮膚の細胞が全部壊死していて自然には再生しないのです。その場合、どうするか。皮膚を移植して損傷をカバーしないと、常に感染の危険にさらされ、包帯を交換するたびに出血や浸出液の喪失を伴うでしょう」

そのような重症熱傷患者を救命する背景には、1970年代にボストンのハーバード大学パーク教授（現在は名誉教授）が開発した「早期切除と植皮」という画期的な新治療法がある。ハーバード大学在籍中パーク教授とともに研究にあたった相川教授に、解説していただいた。

「昔のヤケドの治療法は、軟膏やクリームを塗かえて細菌感染をおこさないようにし、3週間ほどで自然に再生しない部分だけを『デブリドマン』と称して入浴療法などで少しずつ切除し、後は自家植皮する方法でした。



相川 直樹 / あいかわ・なおき

1968年、慶應義塾大学医学部卒業。73年、米国ハーバード大学研究員。88年、慶應義塾大学助教授。90年、慶應義塾大学医学部救急部教授、大学病院救急部長。日本熱傷学会会長、国際熱傷学会（International Society for Burn Injuries）事務局長。日本救急医学会理事。

ところが、パーク教授の開発した新しい治療法は、まず1～2週間以内にIII度熱傷の部分を2～3回の手術で切除し、すぐに生きた皮膚を植皮してカバーするという方法です。こうすることで、生きた皮膚を植皮した患者さんは、普通の状態を保て感染の恐れもなくなりませす。ただ、生きた皮膚を移植するには自家植皮が最もいいのですが、実際には熱傷患者さん自身の健全な皮膚だけでは足りないケースがほとんどです」

たとえば、体表面積60%のIII度熱傷の場合、残り40%の皮膚のうち、顔面や腋下、会陰部などヤケドしにくいのがドナー（皮膚提供部）になりにくい面積を差し引いて使える皮膚はせいぜい10～20%という。つまり、必要な移植面積の3分の1しか自家移植できない。

不足分の皮膚をどう埋めるか。一つには、古典的なメッシュという方法がある。これは切り取った皮膚を網の目のように張り、3～5倍に拡大して植える方法だ。又、頭皮や足の裏などの皮膚を総動員して植えることもある。

もう一つ、本人以外の他人の皮膚を一時的に使う、同種移植（allograft）という方法。実際、日本でもハガキ大の皮膚を母親や友人が提供して移植するケースがある。

「同種植皮は、2～3週間生きた後、免疫的拒絶反応で死んでしまいます。皮膚は、腎臓や肝臓などより拒絶反応を受けやすい臓器ですから、抗リンパ球血清や免疫抑制剤を用いても拒絶反応は免れないかあるいは、強い免疫抑制状態にしなくてはならず、そのため免疫抑

制剤の副作用として感染などの諸問題が生じてきます」

最新、画期的な二層構造の人工皮膚が開発された

そのような難問を克服していく過程で、熱傷治療は進歩してきた。さらに大きな飛躍をさせたのが、前述のバーク教授とMIT（マサチューセッツ工科大学）のヤナース教授とが共同開発した、人工皮膚（インテグラ）。これは、広範囲の熱傷を受けドナーが残っていない場合、「免疫抑制剤を投与しなくても、長期間生きている皮膚と同程度の機能ができる」画期的な代用物だという。

この人工皮膚の最大の特長は、「表皮と真皮との二層構造」になっているところだ。

「いままでにも、人工皮膚の研究はなされてきましたがそれはワンレイヤー（一層の皮膚）だけです。また、培養皮膚、培養表皮細胞というものがありますが、その多くは、『外壁である表皮細胞だけがしっかりできればいい』という発想で開発したものです。ところが、細菌の侵入や乾燥を防ぐ表皮層を健全に発育させるには、まず真皮がしっかりと成長していなければなりません。

その点、二層構造の人工皮膚は、むしろ真皮に重点を置いています。つまり、有機物（プロテオグリカンや人工コラーゲンなど）で人工の真皮層の骨格を造り、移植後その骨格の中に、患者さん自身の細胞や血管が侵入する。それによって、患者さん自身の組織から血管とコラーゲンができて、本人の真皮が造られる仕組みになっているのです。

一方、表皮層は、極めて薄いシリコン膜からできています。このシリコン膜は、水蒸気や酸素の透過性や細菌の侵入防止など、人間の表皮細胞と物理的には類似した特性を備えたものです。真皮が成長し、かつ患者さんの状態がよくなったらシリコン膜をむいて、さらに極々薄い表皮細胞をメッシュ法（前述）でのせていくのです。いずれにせよ、最終的には自分の表皮細胞をのせますが、この方法なら極めて薄い表皮細胞でいいので、たとえば頭皮など同じ部分から短期間で何度もくり返し表皮を採ることが可能になり、ドナー不足をも解消してくれるでしょう」

体表面積95%のIII度熱傷患者を救命できる日がくる

「あるいは、最近確立してきたバイオ技術を駆使して、表皮細胞だけをシート状に培養しておき、将来的にはバーク教授の人工皮膚を使った患者さんがシリコン膜を除去した後に、培養されて殖えた細胞をのせる時代がくるでしょう。そうなると、理論的には、体表面積95%のIII度熱傷の患者さん、つまり頭のとっぺんと足の裏以外は全部ヤケドした重症の場合も助けることができます」

具体的には、そんな患者さんを2日以内に一回目の手術で体表面積の20%を切除し、人工皮膚に置き換える。5日後くらいに二回目の手術をし、2週間以内に計3~4回の手術でIII度熱傷の部分すべてを人工皮膚に置き換えてしまう。そして、状態がよくなり真皮が成長したら、人工皮膚のシリコン膜を患者さんの頭からとった表皮細胞層と交換する。この画期的な方法が普及すれば、現在あるスキンバンク（同種皮膚の提供、または亡くなられた方の皮膚を凍結保存して提供するシステム）と併用して、かなりの成果が期待できるはずだという。

「重症熱傷の治療を飛躍的に進歩させたもう一つの要因は、集中治療における全身管理技術が向上したことですね。これは、体表面積30%以上でII度以上の熱傷の場合、初期に大量の体液が失われることから生じる『熱傷ショック』が大きな問題でした。これに対し、アルブミン液や乳酸リンゲル液などを一日に1万ml（一般の輸液ボトル20本分）以上も大量輸液することもあります。そこで、Swan-Ganzカテーテルを用いたり高度なモニターを使った輸液などの循環管理を初めとして、栄養の管理、代謝の管理が進歩した結果、1980年代には『ショック』は致命的ではなくなったのです。

また、ディスコの火事など閉鎖空間でのヤケドでは、皮膚以外に呼吸器が熱や有毒ガスなどによって傷害される『気道熱傷』が問題になってきます。これも、優れた人工呼吸器が開発され、呼吸管理技術が急速に進歩してずいぶん助かるようになりました」

米国では人工皮膚（インテグラ）がこの3月に認可されました。香港ではかなりの症例が集積されつつあり日本でも臨床治験が計画されています。培養皮膚の研究に関しては、米国に次いで世界で二番目の高水準を行く我国だけに、相川教授が会長として来る5月に主催する『日本熱傷学会』において、ワークショップ『培養皮膚・人工皮膚の臨床応用』の検討がおおいに期待されるところである。

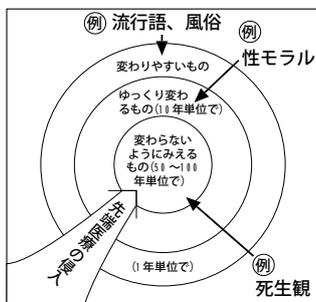
V I E W

今問われる、先端的研究者集団の育成

危うい科学技術政策

米本 昌平

日本は近代以来、欧米の科学技術を輸入し消化することにかけては“無節操なほど”熱心だと言われてきたが、こと先端医療技術にかけては戸惑いを隠せない。これは臓器移植、体外授精、遺伝子医療技術などが、人間の生と死を操作の対象としているために、文化的に変わりにくい日本人の死生観や生殖観と衝突し、不協和音を生



じているからである。このような“心の準備がほとんどないままに態度決定をせまられて途方にくれている”状態に対し、問題なのは、先端医療技術が日本社会に及ぼす影響を具体的にイメージ化し、法律政策のかたちで提起できるセクターがないことだ。

今回は、先端医療が欧米の社会に受け入れられて来た過程の膨大な資料の渉猟、そして現代日本の医療政策へのシャープな分析とホットな問題提起で知られる、米本昌平・三菱化学生命科学研究所社会生命科学研究室長にお話をうかがった。

——先生が科学史・科学論を独学に近いかたちで研究し続けて来られたこと、全共闘世代であることとは関係がありますか。

米本：ズバリあります。僕が京都大学に入ったのは1966年で、2年後の68年に大学紛争が起きました。当時まじめな田舎者だった僕は、憧れの京大理学部が反権威主義的な“世のため、人のため”の学問研究をしていると思っていました。しかし、紛争の中で大学がただの国家組織でしかないことを見せつけられ、思い込みが激しかったぶんだけ、「騙された！」という気持ちになりました。指導教官もなく、卒論も書かないで大学から放り出された形になりました。石を投げても大学は変わらないことが分かった以上、これだけの犠牲を払ったのだから次にどうすべきか考えなければいけない、そこで、一生かけて京大理学部の権威を引きずり降ろすことに命を懸けよう決心してしまいました。復讐心と言っています。

つまり、一流の研究は一流の大学でなければできないという世間の“常識”を覆す。普通の人が普通の生活をする中から、これだけの学問業績を上げられるのだということを身をもって実証してみせ、



米本 昌平 / よねもと・しょうへい

1946年、名古屋生まれ。72年、京大文学部卒業。76年、三菱化成生命科学研究所入所。現在、三菱化学生命科学研究所社会生命科学研究室室長。著書に『バイオエシックス』、『先端医療革命』、『地球環境問題とは何か』など多数。

そのことで大学の権威と研究の独占状態を批判する、そういう人体実験をしてみようと思いました。資金的に誰の援助も受けず、資料も自分で集めて、個人の責任で研究して判断して発言する、それが実現するのが成熟した民主主義社会だと思いました。

内容も、今の科学を相対化することを考え、まず20世紀初頭のドイツの発生学者ドリーシュの生氣論をやりました。

——それが最初の論文になったわけですね。

米本：ええ。生氣論は今では間違っていると言われていますが、彼は「生命現象において情報量を供給する仮想的な力」を理論的に説明しようとした。なぜ誤ったのかも含め、科学論としてやってみようと思いました。

——たいへんだったでしょうね。

米本：そういう自覚はありませんでした。この時期が一番緊張感がありました。時間的には会社への行き帰りや深夜と休日、資金的にはボーナスを全部つぎ込んで、ぎりぎりの状態でした。このメンタリティー（心的傾向）は今だに変わりません。

——その後、この三菱化学生命科学研究所に入られたのですか。

米本：サラリーマン生活を4年でやめた。そういう意味では一種の変節です（苦笑）。研究費と給料が与えられ、24時間全く自由に研究ができる。地獄から天国という感じです。

ここまで自由にしてくれると少しは“世のため、人のため”日本の科学研究がいかにあるべきか考えようと思いました。そこで独力で資料を集め、読んで判断し、先進国の科学技術政策の比較研究というかたちをもって、日本を間接的に批判しようと思いました。批判のための批判ではなく、日本の現状を相対化しよう、と。

——具体的にはどういうことですか？

米本：例えば、僕が入所したころ、この研究所は遺伝子組み換え技術の規制問題を追いかけていました。この技術はどのようなものであって、諸外国はどういう論理と制度でこの研究の規制をするのか、又はしないのか、その実態を横に並べて読んで、その結果として、日本

としてはこうなくては駄目なんではないか、と実証的に問題提起することです。

——なるほど。それに対して大学アカデミズムや中央省庁はどんな反応を示しましたか。

米本：最初は完全な無視ですね。

ところが数年がんばっていると、ある日一転して評価変えになる。今度は専門家と見なされて対等な立場になる。これはどうしてかという、出発点の情報の収集から、全く借りをつくっていないので中立的な立場から公平にものが言えるからです。

例えば、90年に脳死臨調ができた時に、5人の専門家の一員として僕が入りました。僕は医学部卒でもなければ法律家でもない、なんでもない者だが、それが専門家として入るということはよく考えると不思議なことです。ということは要するに、日本という国には、そのレベルの科学政策を分析し立案する類のシンクタンク業務をやっている集団が、実際ほとんどないことになります。これは国として非常に危うい。これは先進国の姿ではないと言わなければなりません。——確かに臓器移植法案の棚上げなど、医療政策も実に危ういですね。

米本：別の問題で言いますと、近年ヒトゲノム計画という人間の遺伝子を全部読んでしまおうという計画が世界的に進んでいますね。ここから発生するかも知れない社会的倫理的問題をどうするのか。実はこの問題は、この技術はどのような性格のものであって、それを使用することによって日本の社会のなかでどういう形で問題が起きそうなのか。問題を未然に防いだり、又は解決するための論理と仕組みをあらかじめ考え、研究開発のあり方について説得力のある政策提案をしなければなりません。しかし、こういうことのできる研究所やセクターが日本にはありません。

——先生は最近環境問題、とりわけ地球温暖化について発言されていますが、ここにも日本の科学政策の危うさがあるのですね。

米本：全く同様です。二酸化炭素の排出増大によって近未来にどの位の影響があるか、どのような制度によって実際に二酸化炭素の排出を削減していくのか、といった自然科学と政治の中間領域を研究する所がない。もともとこんな経済の実態を削るようなことは誰もやるうとはしませんね。日本ではだいたい研究費を貰っても機器を買っ

たり、アンケート調査をするレベルで終わってしまう。逆に諸外国はこの領域に優秀な人間が入りこんで、膨大な研究成果を上げているのです。

——すると、今後は既製のものに囚われない新しいヒューマンネットワークが大切になりそうですね。

米本：僕は今のところ諸外国で進んでいる研究資料を読んで、必要に応じてまとめて、日本社会にとって今何が大事かというようなことを提案していますが、実際ほとんど研究者仲間がいません。むしろ作らないようにしていると言った方が当たっています。それは、お互いに寄りかかって、毒にも薬にもならないことを言うようになる、というか、世の中に向かってきついことを言う時にヒューマンネットが足を引っ張るようになるからです。やっぱり研究者は、流布している学説に対して新しいものを提出するわけですから、メンタリティーとしては周囲の人をすべて敵にまわすぐらいの覚悟が必要です。

僕は今の自分は食客だと思っています。諸外国と比べると、科学技術と近未来の社会を見据えた信頼できるシンクタンクを早くつくらなければいけない。公益のために自発的に研究する人材を援助することを、“金はずすが口は出さない”企業メセナとして、本気でやるべき時が来ているのではないのでしょうか。



感染と人間(2)

中田 光

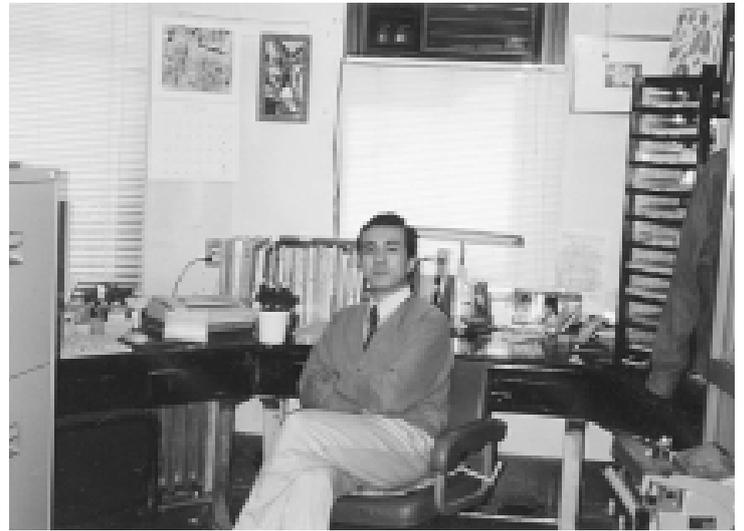
はじめに

レイテ島は太平洋戦争の天王山だったレイテ海戦や大岡昇平の『レイテ戦記』で日本人には馴染み深いのが、正確な位置を知っている人は意外と少ない。フィリピンのほぼ中央に位置し、ルソン島の南、サマル島のさらに南西にある。中央に2千メートル級の山脈がそそり立ち、そこで季節風が遮られるため、島の東側は雨量が多く、しかも広い平野であるためじめじめとしていて蒸し暑い。フィリピン有数の米作地帯であるとともに、住血吸虫などの風土病や伝染病も多い。そのためか西隣のセブ島が人気のリゾートであるのに対して、訪れる日本人は殆どいない。昭和57年の夏、当時京大の5年生だった私は風土病への関心から、レイテ島の日本住血吸虫研究所(SCRIP)を訪問した。

パロのSCRIPは鬱蒼と生い茂るジャングルの中にあるとは思えないほど、様々な設備を備えていた。20床規模の付属病院と外来診察室を持つ他、感染者の疫学調査や検便、住民の衛生教育、中間宿主の宮入貝の調査や殺貝剤の散布などの活動を行っていた。研究棟には国際協力事業団の援助で肝シンチグラフィや脳波計まであった。所長のDr.Blasの計らいで、私は将来の住血吸虫対策のために研究所で勉強している研修生と共に行動することになった。ただでさえ英語が苦手なうえに研修生たちの英語はスペイン語とタガログ語を足して三で割ったような言葉で理解に苦しんだが、彼らは人懐こく親切ですぐに仲良くなった。



写真1：パロ付近のミヤイリ貝生息地



中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ベルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手。

日本住血吸虫と宮入貝

パロからサンタフェ/アウンガングに至る地域は小さな山に面してレイテでも特に湿地、小川、沼が多く、宮入貝の生育に適しているため、住血吸虫症の高発地になっていて、なんと住民の30~45%が感染者だった。SCRIP近くの小川(写真1)にジープで連れて行ってもらい、貝を採取したところ、10分ぐらいの間に、200以上の貝が採れた(写真2)。レイテの宮入貝は日本産よりも小振りで、成長しても、米粒ほどの大きさである。貝は水中に棲むわけではなく、水際の湿った土の中や朽ちたパラワンの葉の裏にくっついて住血吸虫の幼虫(ミラジウム)は卵からかえるとこの貝に侵入し、無性生殖して増殖し、4~6週後には数百~数千のセルカリアとなって水中に泳ぎ出る。セルカリアはたまたま水に入ったヒトの皮膚から侵入し、血液に乗って、肺から肝に移行し、やがて血管内で成虫となる。成虫は雄が雌を抱きかかえるような格好で門脈内に棲み静脈をさかのぼり、小腸近くで一日約3千の虫卵を排出する。虫卵は一部、小腸壁を破って便とともに排出されるが、多くは肝臓の中心静脈の中に塞栓となり(写真3)、炎症を起こして、門脈圧亢進症



写真2：10分ぐらいの間に採集したミヤイリ貝

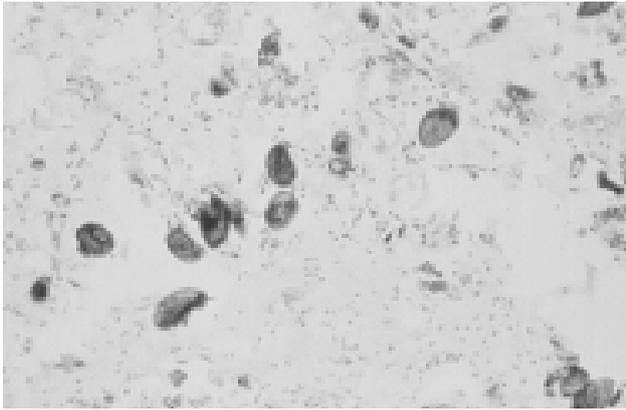


写真3：肝グリソン管内に塞栓をおこした虫卵

がすすみ、肝脾腫大の原因となる。このような経過をとる住血吸虫症を肝脾腫型という。やがて、肝硬変となり、腹水がたまって（腹満という）、貧血と低栄養が進んで、栄養失調や肺炎などの合併症によって死に至るのである。悲しいことに、レイテでは腹満になる患者は大抵たいげない少年たちである。彼らは、大体14才ぐらいで発病し、低栄養のため二次性徴も現れず、腹満になると3年以内に75%が死亡するという。パロ付近の農家には腹満になった少年が無邪気に遊んでいる光景がみられ、胸が痛んだ。

貧困と疾病

高度成長とともに育った私には、パロ付近の農民の暮らしは信じられない程貧しく感じられた（写真4）。フィリピンでは、大土地所有の地主制度がまだ残っていて、農民の殆どが現金収入のない現物支給の生活をおくっている。彼らが口にするのは、自分たちが作る米ではなく、ガビという大きな芋である。蛋白質に乏しいため栄養失調になりやすく、したがって感染症にかかりやすい。レイテ島の首都タクロバンにある保健衛生局の資料によれば、農村の5～9才までの人口は25～29才までの約2.5倍で、半数以上の少年たちが栄養失調や結核、肺炎、住血吸虫症で亡くなっている。パロ付近の小学校では学童の三分之一が病気のために卒業できないという。衣食足りて礼節を知るというが、貧しさゆえの衛生意識の低さも風土病蔓延の一因である。農民は、一般的に用便の際にトイレを使いたがらない。野外か、小川で用を足して、椰子の殻を鋏で薄く削いだトイレットペーパーでお尻を拭いて至る所にそれを捨てる。虫卵はこうして農家の周囲に撒き散らされ、水田に入り、新たな感染源となるわけである。そのため、SCRCPでは小学校を巡回して衛生教育のための8ミリ映画を上映したり、講義を行っていたが、就学率自体が低く、効果は上がっていなかった。

ニューヨークのホームレスの人々に蔓延する結核の場合もそうだったけれども(*)、貧困と疾病はつねに背中合わせの関係にあると思う。癌や先天性疾患の遺伝子治療がすでに現実のものとなりつつある日本人には、治療法や予防法が確立している古典的な感染症がレイテでは何故根絶できないのだろうと不思議に思われるかもしれない。端的に言えば、貧困ゆえの衛生に対する無知と無関心があり、



写真4：パロ付近の農家

薬があっても買うお金がなく、第一、病院にやってくるバス代さえ払えないのだ。ジャングルに住む人々は、昔からある風土病を運命として死をも許容してしまっているように思えた。

SCRCPの林先生

ところで、SCRPIには毎年、東大医科研や筑波大から沢山の医師や寄生虫学者が訪れていたが、甲府市立病院の林正高先生は大学とは独立して国際協力事業団のスタッフとして住血吸虫症の疫学調査と診療にあたっておられた（写真5）。もともと甲府は本症の流行地で、先生は昭和41年以来一貫して治療と研究に打ち込んできた権威だ。私は運よく、先生の診療を見学し、この風土病の根絶にける情熱に触れることができた。先生のご専門は神経内科で、レイテでは虫卵が脳に塞栓を起こす脳症型の調査に来られていた。脳症型は先に述べた肝脾腫型とは異なり、35才ぐらいで発症し、突然、手足に痙攣を起こし、意識を失ったりする発作性の病気で、進行すると手足に麻痺を起こしたり、失語症になったりする。一般的には腹満にはならない。林先生は、レイテでの疫学調査から、脳症型になるか肝脾腫型になるかを決定しているのは家系であることを発見した。つまり、脳症型の患者がいる家系は脳症型ばかりで、両者が混ざることはない。その後の研究でこのタイプ別はヒト白血球抗原（HLA）に強く相関していることもわかった。



写真5：林先生（中央後方）とSCRCPスタッフ



写真6：ブラチカンテルの投与を受ける患者（SCRП付属病院にて）

覆水盆に返らず

SCRПでは78年にバイエル社が開発したブラチカンテルという駆虫薬の投与が始まっていた。この薬は、さしたる副作用はないのに、たった2回、1日だけの投与で完全に駆虫できるという画期的なもので、SCRПの付属病院には連日沢山の腹水の溜まった患者が駆虫に来院していた（写真6）。お盆までには帰国するはずだった林先生もあまりの患者の多さに滞在を延長しておられた。腹水盆に帰れず（覆水盆に返らず）という故事はこのことに由来しているのではないかと思ったほどだ。

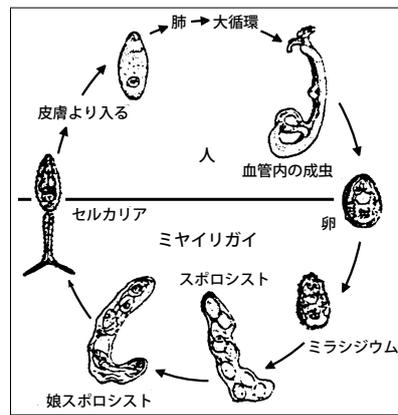
「ブラチカンテルのおかげで山梨のようにレイテでの住血吸虫も撲滅できるのではないのでしょうか？」と林先生に尋ねたところ、「いえ、撲滅までに百年はかかるでしょう」という悲観的な答えが返ってきた。理由として流行地が広汎で、患者の発見や薬の投与が困難であること。薬価が高く、SCRПの予算では賄いきれないこと、日本のODA（政府開発援助）予算は大抵企業の紐付きで、こうした風土病対策には回らないことなどをあげておられた。

700円募金運動

ところが、その後林先生は、自らの予測をまた自らの手で覆すことになるのである。

昭和60年に日比共同プロジェクトが終わった後は、甲府市立病院の中に「地方病（住血吸虫症のこと）に挑む会」を結成され、700円募金運動を開始した。700円はブラチカンテルの一人分の薬価である。ラジオや新聞での呼びかけに全国から7年間で7千万円にも及ぶ募金が寄せられた。中には、お年玉から2千円を寄付した小学生や退職金から10万円を寄付した看護婦さんもいたという。その間、ユニセフやWHO（世界保健機関）などの援助も加わって、これまでに30万人分のブラチカンテルを購入したという。

薬をただ送るだけでは、現地で横流しされたり、換金される恐れもあるため、林先生自らブラチカンテルを持って、身銭を切って毎年渡航し、狭い地域ごとに感染者を集めて投薬するローラー作戦を実施した。その甲斐あって、私がSCRПを訪れた昭和57年に25%もいたレイテの感染者は昨年には3.9%にまで減少している。風土病対策の難しさは、有効な手立てがあっても、その土地の特質にあった



日本住血吸虫の生活史

方法を取らないと失敗することである。甲府盆地では、戦後、宮入貝の棲む小川や排水溝の護岸を徹底的にコンクリート化することで住血吸虫症の流行の終息に成功している。レイテ島の隣、ボホール島では獨協医大の松田肇先生らの努力により、殺貝剤の散布で撲滅した。しかし、レイテではどちらの方法も失敗に終わっている。

林先生のことを思い出す時、大学にはいないタイプの医者だなあとつくづく思う。何時だったか、作家の三浦綾子さんが「人生の価値とは他人のためにどれだけのことを成し得たかということを決まる」と書いていたが、30万人の感染者を救った林先生の情熱にはただただ感嘆せざるを得ないのである。

今回、この稿を書くにあたって、15年ぶりに林先生に電話した。受話器の向うから昔と変わらない温かい声が返ってきた。「そうですか。あの時はそんなことを言いましたか。でも、今は全く違う考えを持っています。私は撲滅に自信を持っています」と力強く話された。後日、私の処へ送ってくださった沢山の先生の著作の中に次のような一節があった。

「腹水が溜まり食事もとれない栄養失調の患者が、裸足に近い格好で、パロ地区の対策研究所に歩いてくる。服用すれば必ず命は救われると分かっている、特効薬は高価で自分たちでは買えない。その患者たちに、月給も遅配続きの医師たちが、そっと帰りの車代（1ペソ）を渡しているのを見て胸を打たれた」

レイテを去る日、「これでレイテから当分の間、日本人がいなくなるわけですね（林先生は一足先に帰国されていた）」と研修生に言うと、「そんなことはない。パロから15キロ離れた村にナカムラという日本人のご婦人が住んでおられる」という。びっくりして聞くと、レイテに出征して行方不明になった婚約者を一人で捜しにきてそのまま住みついてしまったのだという。レイテにいた日本軍は殆ど玉砕に近い状態だったことを思うと、切ないが、美しい話だと思った。日本から持ってきたあずきや肉の缶詰、お菓子がまだ余っていたので、「その村に行くときにそのご婦人にこれをあげてください」と研修生の一人に託した。

マニラに帰って、サンラザロホスピタルの越後^{おろぬま}貴先生に会い、こんなことがありましたとお話したところ、フィリピン生活が長い先生は、

げらげら笑われて、「そりゃーきみは、その研修生の胃の腑を肥やしたってわけだ」とおっしゃった。(つづく)

レイテ島の日本住血吸虫症撲滅のため、7百円募金運動にご協力ください。連絡先は次のとおりです。

甲府市立病院内「地方病に挑む会」

代表：林 正高

電話：0552-33-7101

郵便振替番号：00420-7-7730

参考文献：林正高著「日本住血吸虫症『安全』宣言は時期尚早」、『中央公論』1996年3月号, p.216～p.223

*ニューヨークの結核, 本誌, Vol.6, p.6～8参照

L o v e

『我が友ジャン・ムーラン』

レジスタンスの英雄の生と死

日本語版、刊行さる

ピエール・ムニエ著 福本 秀子訳

過去に根もとを置く人間の営みは、未来に向かって葉を繁らせる

1940年、シャルトル知事であったジャン・ムーランは、仏・ペタン政権の「武器を捨てよ！」の大本命の中、たった一人で独・ナチスへの反抗を開始した。

南部地域の急進派レジスタンス組織と連絡をとり、ついでドゴール將軍の指揮下に入る。42年、南部の抵抗組織を結集して秘密軍隊を組織。占領下フランスにおける国民委員会全権代表としてレジスタンスの地下組織をまとめ、全国抵抗評議会議長をつとめる。43年逮捕され、ゲシュタポの酷い拷問にも口を割らず、獄死。

「ヒトラーの抑圧がどれほどのものであるにせよ、決して戦いを放棄しない」と誓った彼、ジャン・ムーランは、典型的な南仏人であった。人生を愛し、冗談と賭事の好きな楽観主義者にして、女性にもてるスポーツマン。感じやすく傷つきやすい一方で、左翼急進主義の説得力ある交渉家。対照的性格の北部人ドゴールをして、「信念と知略を兼ね備えた男」と言わしめた。

仏・ブルゴーニュの古老、ピエール・ムニエ氏は、ジャン・ムーランとともに戦った友であり忠実な部下であった。レジスタンスの壮絶な殉教者ジャン・ムーランにまつわる様々な伝説に対し、彼の生と死の真実を戦後50年を経て初めて語る。「この卑劣な犯罪の前に口を閉ざし、この悲劇を生み出した言語道断な軽率さを前に、沈黙を守らなければならないのだろうか。歴史は一体どうなるのだ！」

本誌読者10名に『我が友ジャン・ムーラン』をさしあげます。ご希望の方は添付ハガキでお申し込み下さい。



『我が友ジャン・ムーラン』

蜂起20周年の1964年12月19日、アンドレ・マルローは「青年よ、君はこの男の最後の日の、気の毒にも形を失った顔に、もう口をきかなくなった唇に、君の手をさしのべるように、今日この男について思いをはせてみたらどうであろう。その日この男の顔はフランスの顔そのものであった」と呼びかけた。

一禅者からキリスト教徒への提言

キリスト教と仏教の 共通の根拠（4）

秋月 龍珉

スイス・ツークで開催された第一回キリスト教・仏教対話集会における講演
(1994年7月)より抜粋

(五)

出家した釈尊は、はじめマガダの地に、バラモンで禅定（ヨーガ）を修し、高德の名の高い、アーララー・カーラーマヤ、ウッダカ・ラーマプッタを訪れて教を乞うたが、それらの師たちの教えにあきたらず、その後、断食などの種々の苦行に励んで六年を経過した。あるとき、苦行の無益さを感じた仏陀は断食を放棄して、村のそばを流れるネーランジャラー河で水浴びをしたのち、近くの村の乙女スジャータのさしだす乳粥をいただいて、体力をつけた。仏陀はこうして身心を調べてガヤーの地に赴き、ピッバラ（のちの菩提樹）の大樹の下に吉祥草を敷いて坐り、静かに禅定に入った。

こうして何日か仏陀は坐禅して深い深い禅定に入った。坐禅とは自我を空じて無我の境地に入ることである。そして、ある朝まだき、その禅定の絶対無が爆発して突然ダンマ（法、真理）が露わになるという一種の直覚を体験したのである。それは深い禅定の我の境地の中にふと明けの明星のキラメキを見た、その感覚の縁によっての悟り経験であったと伝えられる。こうして仏陀は自ら法を覚って覚者（ブツダ）となったことを自覚した。この経験事実、すなわち「悟り」（覚・証・悟）を「菩提」とよび、「成道」と称する。

仏陀は何を悟ったのか。学者たちは「縁起」の理法を悟ったのだなどと言い、高名の布教師たちもその口まねをするが、そんな理法なら、ふつうの思索でも届く。何もことさらに悟ったなどというほどのこともない。仏陀は「無我の我＝我ならぬ我＝無相の自己＝無心の心＝無位の真人」を自覚したのである。

「自我を空じて無我になったとき」に「法（真理）が露わになった」というのは、こうした「無位の真人＝無相の自己」の自覚をいうのでなければならない。

「〈空〉とは〈自他不二〉である」。仏陀はそのとき、「あ、私（無相の自己）が光っている」と叫ばれたに違いない、とは山田無文老師の名言である。「自我がないとき、自己ならざるはない」「無我で空のとき、すべてが自己となる」。「〈空〉とは〈物我一如〉」である。だから、星でなく私が光っていた！「悟り」とはそういう私（無相の自己）の自覚である。我とそれの「物我一如」はただちに我と汝との「自他不二」である。そんな「物我一如・自他不二」の自己が自覚されたら、すべての物が自己であるから、一杯の水も一枚の紙



秋月 龍珉 / あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院終了。

花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧。

著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案・実践的禅入門』『禅門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘・仏教のポストモダン』等多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露になるとき』など。

も大切に生かすかねばならない。

ここでは他人の痛みが即自己の痛みだから、すべての人が「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」（宮沢賢治）。大智は大悲として働かざるを得ない。

恩師鈴木大拙は、「極楽は住ききりにする所ではない、住ったら、すぐに還ってきて、娑婆にもどって苦しんでいる同胞の苦しみに代わるのだ」と言われた。

この「衆生無辺誓願度」（生きとし生ける無限の衆生を誓って済渡せんことを願う）という菩薩の願行に大乘仏教の真髓がある。

思えば、これはキリスト教でも全く同じことである。キリスト教には「神を見た者は死ぬ」という恐ろしい言葉がある。

私は先に釈尊の仏法は「無神論」だと言った。近代人が無神論という時は、自我も世界もあるが、神はないということだ。しかし、禅仏教にいう無神論は、その肝心の「自我」がない、もちろん世界もない、「絶対無」をいうのである。

それは「神がない」という否定は、実は肯定的な「無の神」を言わんとした表現である。だから、自我を空ずる、無我になる、というより、神に接したとき、人間は死ぬ、自我は空ぜられ（ゼロになり）「無我」ということになるほかはない。そのときにのみ「神の愛子（いとしご）」として真に「本来の自己」を確立し得るのである。

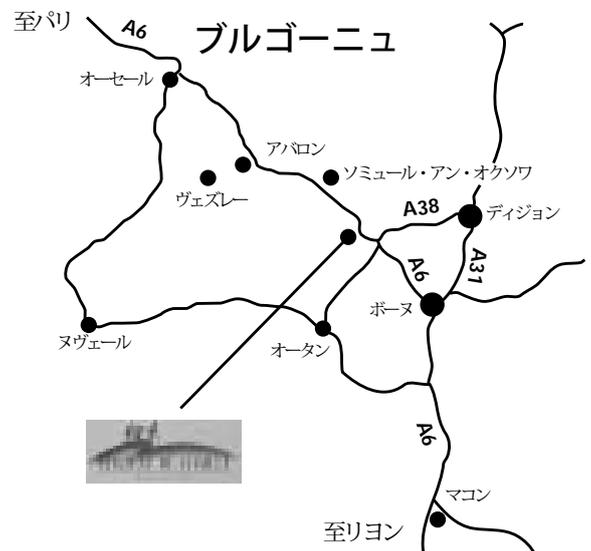
これを「〈無我〉のときにダンマ（法＝真の实在・実存）が露わになる」というのである。これを仏教徒は「死んで生きるが禅の道」といい、クリスチャンは、「キリストとともに十字架に死んで、キリス



Château de Chailly

Château de Chailly / シャトー・ドウ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの町並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。



お問い合わせ：(株)佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ
Telephone：03 5762 3010
担当：岩沢

トとともに復活する」「もはや私＝自我は生きていない。キリストが私のうちに生きる」(パウロ) というのである。

この「内なるキリスト」を「無相の自己＝無心の心＝無位の真人」すなわち「仏」というのである。こうして「自我(エゴ)に死んで自己(セルフ)に生きる」というところに、私は仏教とキリスト教の宗教としての共通の根拠を見るものである。

ここに私は禅仏教徒として、一大反省を余儀なくさせられる。禅者は本当に死んでいるか。「真の神」を見ているか。いうところの「絶対無」に接しているか。「神を見たものは死ぬ」という、キリスト教のあの言葉が、禅者としての私の心に厳しく響くのである。ほとんどの禅者が「無我」の仏法を「大我」にしていないか？

一方キリスト教にも先に言った「真人の自覚」という「悟り」がある。あらねばならない。この「悟り」からこそ「くいと小さき者への愛」が「神のものへの愛」である」というキリスト教の愛の実践の源泉が明らかに見られる。

キリスト教は「信の宗教」であって、一見すると禅のような「覚の宗教」ではないように考えられるがそうではない。「行(ぎょう)」から入る「覚の宗教」も、「信」から入る「救いの宗教」も、宗教としては同じ「自我に死んで自己に復活する」という「無我(空)のときにのみダンマが露わになる」という宗教的実存の道にほかならない。

もし、キリスト教だけが人類普遍の真理なら、「お前たちは悔い改めてキリスト教徒になれ」というよりなく、そこには例の十字軍という宗教戦争肯定の考え方にたつらなりかねない。それではかつて上田敏がうたったように、「キリスト教徒血に渇き / 群羊守る力なき異教の民の声呑むを」ということになるよりほかにならう。

すべての宗教者が自己の宗教を相対化して、諸宗教間の対話を真剣に続けようと努めない限り、人類の平和は望めない。人類は21世紀を間近にして、今日のはじめてようやくそうしたことの大事に気づいてきたのである。

私たちは私たちのこうした小さな集会在人類の平和、したがって「神の支配」が「天におけるように地の上にも」行われるための大事な行持であることを信じて互いに努力していこうではないか。インマヌエル。アーメン！(了)

永遠の抒情詩人ラマルチーヌ

島野 盛郎

ブルゴーニュを愛した作家たち (2)

19世紀初頭のフランス文学の主潮はロマン主義であった。その代表的な詩人は、『レ・ミゼラブル』の作者として世界中の人びとに知られているヴィクトル・ユゴー、詩人哲学者といわれたアルフレッド・ド・ヴィニー、青春詩人で女流作家のジョルジュ・サンドとの恋愛で有名なアルフレッド・ド・ミュッセ、新しい詩の扉を開いたと評されているアルフォンス・ド・ラマルチーヌの4人である。これを一般にロマン派の四大詩人と呼んでいる。このうち、ラマルチーヌがブルゴーニュの出身である。ブルゴーニュワインの中心地・ボヌの町の南、大都市リヨンの北方にマコンという町がある。ここがラマルチーヌの故郷。

マコンの人たちは、ラマルチーヌを生んだことに大きな誇りをもち、現在、ラマルチーヌ博物館が設立されている。いったい、ラマルチーヌとはどんな人であったか。今回はラマルチーヌ像に迫ってみることにした。

大ヒットした『瞑想詩集』

アルフォンス・ド・ラマルチーヌ (Alphonse de Lamartine) はフランス大革命の翌年、1790年11月21日、マコンの小貴族の子に生まれた。父は王党派の士官で、ルイ16世やマリー・アントワネットが処刑された1793年には危うく犠牲者になるころであった。ようやく難をのがれ、故郷ブルゴーニュの葡萄畑の経営者になった。ラマルチーヌが7歳のとき、近くのミリー村に移った。母は敬虔なキリスト教徒で、ラマルチーヌを慈しみ、息子の教育をデュモンという司祭に頼んだ。この司祭から受けた影響は大きく、後年、ラマルチーヌは『ジョスラン』(1836)という叙事詩で司祭を主人公として歌っている。13歳でリヨンのピュピエ学院に入り、19歳でベレーの宗教学校に学ぶ。ラマルチーヌは青年になるまでほとんどこの地方で過ごした。起状に富んだ優美な田園で夢想と読書の幸せな生活を送ったのである。

21歳のときイタリア旅行をし、26歳の秋、神経症に悩み、湯治場エクス・レ・バンへ行く。そこで胸を病み療養に来ていた黒い髪と隈のある眼の美しい女性に出会う。ラマルチーヌはたちまち恋に落ちた。彼女はジュリー・シャルルといひ、有名な物理学者の若妻でラマルチーヌより6歳年上であった。しかし人妻であろうと、年上である

うと、彼のプラトニックな思ひは頂点に達し、しばしば逢瀬を重ねた。やがて別れの日が来たとき、翌年このエクスのブルジェ湖畔での再会を約束した。しかし、ジュリーの胸の病は重く、その冬に不帰の客となってしまった。ラマルチーヌは再会できなくなった苦しみを故郷・ミリー村で詩に綴った。3年後、24篇の詩集『瞑想詩集』(Meditations Poétiques, 1820) を発表した。これが大評判となった。24篇のうち、ジュリーをしのんで綴った「湖」、「孤独」、「谷間」、「秋」の4篇は絶賛に価するとの評価を得た。

紙数の都合で、その一部のみを紹介すると一。

《秋》

いざさらば！名残の緑に覆われた森よ！
芝生に散らばる黄ばんだ葉むらよ！
さらば、最後の美しい日々よ！自然の喪服は
苦惱にふさわしく、わが眼差をそそる！

夢想者の足どりよろしく、私は寂しい小道をゆく、
私はいま一度、最後に見おさめておきたい、
あの蒼白い太陽を、弱い光りは私の足元で
わずかに森の闇を突きやぶる！

そう、自然が息を引きとるこの秋の日々の、
その曇った眼差しは、私には一段と魅惑的なもの、
それは一人の友との別れ、やがて死によって
永遠に閉ざされる唇の最後の微笑だ！

……………

花はその香を微風に委ねつつ散り落ちる。
そうして彼は別れを告げる、生へ、太陽へ。
私もまた死んでいく。そしてわが魂は臨終のときに
立ち上がる
悲しくも耳に快い音のように。
(『ラマルチーヌ詩集』窪田般彌訳より)

以上の詩の中では、友人と表現し、彼と呼んでいるが、実際はジュリーへの追慕を歌ったものと考えてよいだろう。

わが国のフランス文学の権威・渡辺一夫博士は『瞑想詩集』について次のように述べている。「この詩集の反響はきわめて大きなものでした。



ラマルチーヌの肖像

その用語や思想が新しくなかったわけでもなく、詩の形式が革新的であったのでもありません。ただこの詩人は、人間の魂の底から湧き上がる囁きや叫びを、なにものにもとられずに表現していたのです。ラマルチーヌは山や森や湖などの自然のなかで瞑想にふけたときの感覚や感情を主として歌いあげますが、半ば霧におおわれた風景が流れ行くような感じを与えます。古い文学に倦みはてていた人びとは、ラマルチーヌの詩歌のなかに、新しい息吹きを感じ取り、熱狂したのでした。(岩波文庫『フランス文学案内』より)

ラマルチーヌの詩は明らかにブルゴーニュ地方の自然によって生まれたものといえる。

『魂のため息』がテーマ

『瞑想詩集』は一介の無名詩人・ラマルチーヌを詩壇の寵児とし、それによって1820年は輝かしいロマンチズムの詩歌誕生の記念すべき年となった。

その年、ルイ18世の知遇を受け、外交官となり、ナポリに赴任。まもなくイギリス女性、マリアンヌ・エリザ・バーチと結婚し、イギリス旅行ののち、父が購入していたマコンのほりと、サン・ポアンの館に住む。以後、パリと館を往復しながら詩作に耽る。『ソクラテスの死』、『続瞑想詩集』(1823)、尊敬する大詩人・バイロンの死を悼んだ『ハロルド巡礼最後の歌』(1825)、神への讃歌ともいべき『宗教的諧調詩集』(1830)などを発表する。しかし、この頃から詩人は政治に関心を持つべきであると自覚し、代議士となる。43歳(1833)。いかなる党にも属さずキリスト教的な人道主義をとえ、死刑や奴隷の廃止を訴える。

政治家となったのちも、詩や文学的散文、政治パンフレットなどをつぎつぎに発表してゆく。叙事詩『ジョスラン』(1836)、『天使の失墜』(1836)、『静思詩集』(1839)などのほか穏和な革命思想を大衆に呼びかけるため、『ジロンド党史』(1847)を書いた。そして2月革命(1848)勃発後の臨時政府では首脳の一ひとりとなって外務大臣になる。59歳。しかし華やかなラマルチーヌの政治活動はそこまでだった。その年の12月の共和国大統領選挙に立候補して大敗し、政界から引退した。晩年は不遇で借財の返



マコンのほどり、サン・ポワンの館

済に苦しんだ。それでも詩や小説を書く意欲は失わなかった。小説『ラファエル』、『1848年革命史』(1849)、小説『グラジェラ』(1852)、叙事詩『ヴィジョン』(1853)、マコンの自然を回想した叙情詩『葡萄畑と家』(1857)などを発表した。好評だった小説『グラジェラ』は、ラマルチーヌがナポリ滞在中に知りあった娘を回想して書いたものである。ナポリから船に乗ったひとりの詩人が難破して、漁夫の住む島に上陸し、そこでグラジェラに会い、ふたりは恋に落ちるが、詩人は本国に帰り、あとに残されたグラジェラは恋にやつれてこの世を去るという、いかにもロマン主義作家好みの題材である。

1869年2月28日、病魔と老齢のため、やせ細ったラマルチーヌはパリで死んだ。78歳、当時としては高齢である。遺体は彼が生涯愛してやまなかった故郷マコンのサン・ポワンに埋葬された。

ラマルチーヌは自分の詩について、しばしば「魂のため息」であると言った。そこには自然と愛と神の慈悲を合一させた理想主義がある。ラマルチーヌは政治に手を出して失敗したが、理想に生きた甘美な抒情詩人としての生命は永遠である。

島野 盛郎 / しまの・もりお

1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター。「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる-越路吹雪物語』(白水社)、『食を創造した男たち』(ダイヤモンド社)などがある。



Luxor Temple, Egypt, 1989 © Richard Misrach Original in Color

Richard Misrach

Photographs

5.8(wed) — 6.28(fri) 1996

PHOTO GALLERY INTERNATIONAL

2-5-18 Toranomon, Minato-ku, Tokyo 105



リチャード・ミスラックはアメリカ西部を拠点に砂漠やそれを取り巻く環境を撮影し続けている写真家です。1980年代に台頭してきたカラー写真の表現の中で、ミスラックの作品はその映像の中に多くを内包する独特の世界を創り出しています。

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区虎ノ門2-5-18 〒105

tel. 03 3501 9123 fax. 03 3591 1197

(地下鉄銀座線虎ノ門駅下車2番出口)

月・火・水・木・金 11:00-19:00 / 土・日・祝日 休館

(1995年11月16日より営業日が変わりました)

